

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター



環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ 2013-2014年 冬期概要

2013-2014年冬期調査の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2013-2014年冬期結果概要をお知らせします。

2013年度冬期調査は、2013年12月1日から2014年2月28日までの期間実施されました。116ヶ所の調査サイトが参加し、このうち一斉調査の参加は104ヶ所でした。



写真1. クサシギ

継続サイトで最大個体数が最も少ない冬

2013-14年の冬期の一斉調査期間(1月19日を基準日とした前後1週間の調査)では、シギ・チドリ類37種31,038羽、ツクシガモ 4,934羽、ヘラサギ 8羽、クロツラヘラサギ 253羽、ズグロカモメ 2,338羽が記録され、最大個体数(調査期間内に記録された個体数の

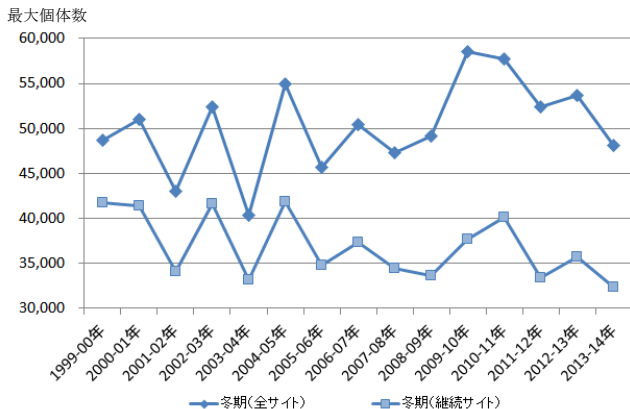


図1. 冬期調査の全サイトの最大個体数合計と1999-2000年から調査を継続しているサイトの合計の推移

最大値)の合計は、シギ・チドリ類44種 48,126羽、ツクシガモ6,091羽、ヘラサギ21羽、クロツラヘラサギ368羽、ズグロカモメ3,623羽が記録されました。

1999年からの「全サイトの最大個体数の合計」と「連続して調査が継続されているサイトの最大個体数の合計」を、グラフに示しました(図1)。全体では2009年をピークに減少傾向にあります。また継続44サイトでは、2010年以降減少傾向にあり、今年度は32,367羽と1999年以降で、最も個体数の少ない冬でした。

冬期の総観察個体数の98.5%を占める関東以南の多くの地域で前年より最大個体数が少ない傾向がありました(図2)。

| 地域別総個体数(最大渡来数)指標 Number of Max Count index | |
|---|------|
| 2013年度冬期 2013-14 Winter | |
| 北海道東北部 | 3.00 |
| 北海道東部 | 3.50 |
| 北海道西部 | 1.00 |
| 東北太平洋岸 | 1.49 |
| 東北日本海岸 | 3.65 |
| 関東太平洋岸 | 0.96 |
| 関東内陸湿地 | 0.65 |
| 東京湾と相模灘 | 0.83 |
| 北陸沿岸部 | 1.37 |
| 駿河湾 | 0.05 |
| 伊勢湾 | 0.63 |
| 大阪湾周辺と紀伊水道 | 0.59 |
| 山陰 | 0.92 |
| 瀬戸内海西部と周防灘 | 1.24 |
| 四国太平洋岸 | 0.38 |
| 博多湾周辺 | 1.48 |
| 有明海と不知火海 | 0.94 |
| 九州南部 | 0.50 |
| 沖縄本島 | 0.89 |
| 宮古・八重山 | 0.88 |

※ 昨年度冬期を"1"とした変化

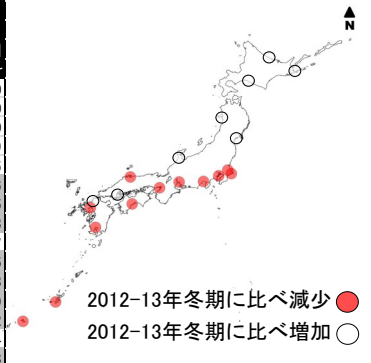


図2. 2012-13年冬期と2013-14年冬期のシギ・チドリ類の最大個体数の比較

各種の状況

各種について前年冬の最大個体数と比較した表を示します(表1)。トウネン(0.25:前年比)の減少率が最も大きく、次いでオオハシシギ(0.49)、キョウジョシギ(0.66)、ケリ(0.68)、タゲリ(0.69)、メダイチドリ(0.75)、オオメダイチドリ(0.76)、コアオアシシギ(0.80)が前年の8割以下となりました。また、全国の越冬個体の66.3%を占めるハマシギも前年比の0.88と

表1. 各種の2012-13年冬と2013-14年冬の調査に参加した116サイトの最大個体数の合計と前年度比。2012-13年冬を“1.0”として増減率を表記。青色は前年よりも20%以上減少した種。2013-14年冬に10個体以上確認されている種を対象とした。

| 種名 | 最大個体数 | | | 種名 | 最大個体数 | | | 種名 | 最大個体数 | | |
|---------|-----------|-----------|------|----------|-----------|-----------|------|----------|-----------|-----------|------|
| | 2012/13年冬 | 2013/14年冬 | 前年比 | | 2012/13年冬 | 2013/14年冬 | 前年比 | | 2012/13年冬 | 2013/14年冬 | 前年比 |
| ハマシギ | 36,148 | 31,924 | 0.88 | タシギ | 462 | 382 | 0.83 | イカルチドリ | 73 | 64 | 0.88 |
| シロチドリ | 4,199 | 4,322 | 1.03 | インシギ | 290 | 259 | 0.89 | オオメダイチドリ | 70 | 53 | 0.76 |
| ダイゼン | 2,820 | 2,885 | 1.02 | アカアシシギ | 149 | 164 | 1.10 | クサシギ | 62 | 53 | 0.85 |
| ミユビシギ | 2,679 | 2,399 | 0.90 | チュウシャクシギ | 84 | 158 | 1.88 | タカブシギ | 31 | 36 | 1.16 |
| タゲリ | 1,826 | 1,265 | 0.69 | セイタカシギ | 137 | 157 | 1.15 | トウネン | 128 | 32 | 0.25 |
| ムナグロ | 1,274 | 1,054 | 0.83 | ケリ | 186 | 127 | 0.68 | オオハシシギ | 55 | 27 | 0.49 |
| メダイチドリ | 1,064 | 795 | 0.75 | コチドリ | 108 | 108 | 1.00 | コアオアシシギ | 20 | 16 | 0.80 |
| ミヤコドリ | 608 | 528 | 0.87 | キョウジョシギ | 155 | 103 | 0.66 | オジロトウネン | 14 | 13 | 0.93 |
| アオアシシギ | 401 | 504 | 1.26 | キアシシギ | 97 | 93 | 0.96 | | | | |
| ダイシャクシギ | 397 | 453 | 1.14 | ヒバリシギ | 85 | 93 | 1.09 | | | | |

なっており減少していました。

トウネンは沖縄・南西諸島で越冬数が多い種ですが、2007-08年の479羽をピークに断続的に減少して2004年以降最も少なくなりました(図3)。また、オオメダイチドリ、ケリ、キョウジョシギも継続的に減少傾向にあります。その他メダイチドリ、タゲリ、オオハシシギは、今冬期だけ見ると減少していますが、2004年の調査開始以降は増加傾向にあります。逆に観察が増えたのは、チュウシャクシギ(1.88)、アオアシシギ(1.26)、タカブシギ(1.16)、セイタカシギ(1.15)、ダイシャクシギ(1.14)などです。チュウシャクシギ、アオアシシギ、タカブシギ、セイタカシギは、全国の総観察個体数が2004年以降、徐々に増加しています(図3)。ダイシャクシギは、近年越冬数が減少していましたが、今冬期は増加していました(図3)。

越冬数の減少や増加については、夏期の繁殖成功の状況や越冬期の気温などが影響していると思われます。継続的に増加傾向にある種は越冬地を広げている可能性もあります。これらの種と冬季の気温などをモニタリングしていくことで、温暖化の影響を見る

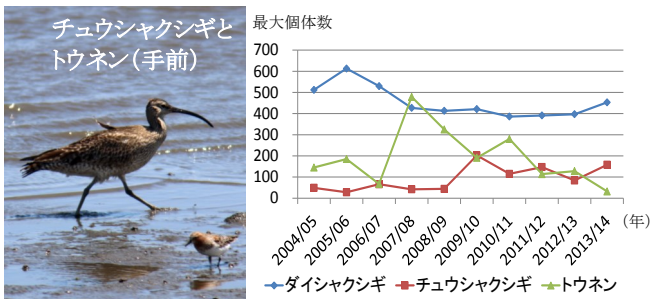


図3. チュウシャクシギとトウネンの最大個体数の推移

ことができるかもしれません。

シギ・チドリ類以外の絶滅危惧種の記録

干潟や湿地に生息する絶滅危惧種であるツクシガモ(環境省レッドリスト: II類)、ヘラサギ(同: 情報不足)、クロツラヘラサギ(同: I B類)、ズグロカモメ(同: II類)の最大個体数の合計の推移を図4, 5に示します。ツクシガモ、クロツラヘラサギ、ズグロカモメは増加傾向にあります。ヘラサギについては、渡来数が少ないのですが、20羽前後の飛来が継続的にあります。4種とも国内の個体数は安定的ですが、主な越冬地である大陸沿岸の生息環境の影響も関係する種と考えられるので、今後も注視していく必要があります。

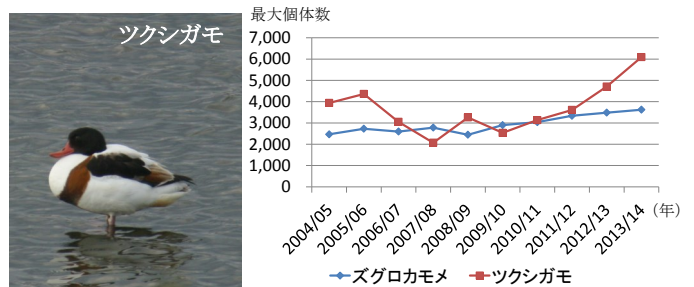


図4. ツクシガモとズグロカモメの最大個体数の推移

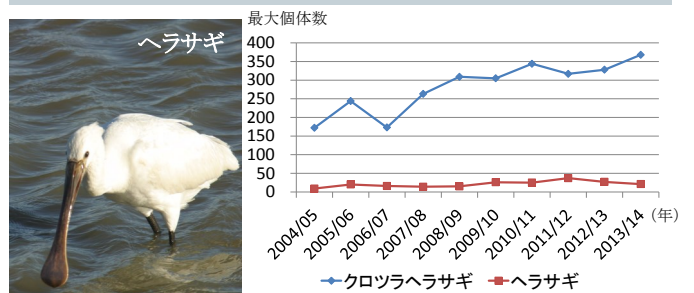


図5. ヘラサギとクロツラヘラサギの最大個体数の推移

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター 2013-2014年 冬期概要

タイトル写真: 冬羽のハマシギ

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史 電話/Fax: 042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp